ティーチングポートフォリオ

生活文化学科子ども生活専攻
特任教授　武田　早苗

1　教育の責任（教育活動の範囲、何を担当しているのか）

主担当は、幼児の造形表現に関わる領域であり、「保育内容(表現Ⅰ)」及び「子どもと造形表現」の授業を受け持っている。「保育内容(表現Ⅰ)」では「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」（以下、「指針・要領等」と表記）に示された領域「表現」のねらいと内容、幼児期の造形表現の特徴を解説し、併せて演習を通して保育者としての基礎的な技能や発想力・構想力を体験的に身に付けていくことを目指している。「子どもと造形表現」ではより実践的なグループワークや模擬保育を行い、学生自身の造形体験を増やすとともに、活動の振り返りを重視して幼児の造形表現に対する理解を深め、保育者としての実践力を高めることを目指して授業を展開している。

「保育内容(表現Ⅰ)」及び「子どもと造形表現」に加え、保育士資格及び幼稚園教諭免許の取得に必要な科目も担当している。その他に、学科共通教養科目の「スタディスキルズ」及び学科基幹科目である「生活文化各論（一部のみ)」を担当している。

科目名		形態	単位数	開講時期	資　　格	卒業必修
専攻科目	保育内容(表現Ⅰ)	演習	1	1年前期	保育士(必修) 幼稚園(必修)	○
	子どもと造形表現	演習	1	2年後期	保育士(必修) 幼稚園(必修)	○
	保育内容(言葉)	演習	1	1年前期	保育士(必修) 幼稚園(必修)	○
	子どもと言葉	演習	1	2年後期	保育士(必修) 幼稚園(必修)	○
	保育実習指導Ⅱ	演習	2	2年通年	保育士(必修)	
	教育実習	実習 事前事後指導を含む	5	1・2年通年	幼稚園(必修)	
教養科目	スタディスキルズ	演習	1	1年前期		○
基幹科目	生活文化各論	講義	2	1年後期		○

2　教育の理念(育てたい学生像、あり方、教育目標)

(1)　保育の本質・目的を理解する

保育における保育士の働きとして、保育全般を通して安心・安全な環境の中で子どもが自発的・意欲的に物や事に関われるような活動を計画・実践すること、子どもの主体的な活動や子どもの相互の関わりを大切にし、情緒の安定を図りつつ、周囲の人々との望ましい関わり方を体験を通して身に付けていけるようにすること、子どもの発達の過程を環境との相互作用を通して資質・能力が育まれていく過程と捉え、それぞれの子どもの育ちを大切にしながら生活や遊びを通して総合的に保育することが求めら

れている。特に、遊びと造形活動の連続性や、造形以外の領域との関連性、造形活動を介した子ども相互の関係性などが発展していく過程においては、上記の三つの働きかけが重要な視点となる。「保育内容(表現Ⅰ)」の授業では,「指針・要領等」に示してある保育の本質や目的について，実践的な演習を通して体感的に学べるようにする。

(2)　幼児期の造形表現のねらいと内容，及び子どもの発達と造形表現の特徴について理解する

「指針・要領等」では、「感性と表現関わる領域『表現』」（以下，領域「感性」と表記）の中で、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」ことを目標として掲げている。

幼児期においては、遊びから表現に移行したり、表現している行為が遊びに繋がったりと、遊びと表現が織り交ざりながら発展・収束していく。つまり、表現においても遊びと同じように、子どもが主体的になって取り組めるような環境づくりや働きかけが大事であり、日頃から子どもの興味・関心をキャッチするような保育者の姿勢が重要になってくる。加えて、子どもの発達の過程を尊重し、一律の完成度を求めたり保育者側の意図に沿わせるような指導・支援を行ったりするのではなく、子ども一人一人の表現を尊重し、そこに込めた思いに寄り添い、子どもなりの創意工夫をしっかりと見取り認めていくことが大切である。これらのことを念頭において、「子どもと造形表現」では，幼児期の子どもの造形表現の特徴と、子どもの表現を支える保育者としての関わり方を学び、実践に活かせるようにする。

(3)　資格・免許取得を目指して実践力を高める

「保育実習指導Ⅱ」においては，保育士資格を取得するために保育所実習Ⅰ及びⅡ，施設実習の計３回の実習を、幼稚園教諭免許取得に向けては２０日間の教育実習を行うことが必須となっている。そのために実習の目的や、保育園(所)，幼稚園・施設のそれぞれの特徴・特質を十分に理解した上で、実習に向けた自分の課題を設定し、指導計画案の作成や実習記録の執り方などの実務的な内容と共に実習生としての心構えや態度、動きなど、実習に臨むにあたって必要となる事柄について、きめ細かく指導を行う。全ての実習終了後には「実習実践報告会」を実施し、まとめと報告を行うとともに、発表を通して自らの課題を明確にし、次の学びに繋げられるようにする。

(4)　初年次教育を通して短大の学修と将来を関係づけ，学習意欲の向上を目指す

教養科目である「スタディスキルズ」では、「学内生活に関する事項」「本学の歴史」「施設の活用方法」「具体的な学習の進め方」について授業を行う。また、入学前課題の事後指導を通じて基礎学力の向上を目指す。さらに、実習の取り組み方やお礼状の書き方など、専門科目を学ぶ上での常識も学んでいく。

(5)　生活と造形表現の関係性を知り，身近な造形物への興味・関心を高める

基幹科目である「生活文化各論」では、身近な物の色や形に着目し、その特徴や与える印象を活用し我々の生活に役立っているものがたくさんあることを学び、自分の生活をふり返り、造形物への興味関心を高めるとともに、より一層生活の質を向上させていけるようにする。

3　教育の方法（理念を実現させるための考え方、方法）

(1) 造形表現に関わる科目について

○　領域「表現」で示されているねらいや内容を深く理解できるように様々なテーマを設定し、楽しんで学べるように授業の組み立てを工夫した。また，幼児が実際に造形活動に取り組んでいる様子や幼

児の作品の動画・写真の視聴を通して視覚的に幼児期の子どもの造形表現の特徴について把握しやすいようにし、基礎的な知識や技能，発想力・構想力を体験的に身に付けられるように配慮した。

○　一つの素材や題材から複数の表現活動を考えたり、複数の表現方法から自分のイメージに適した方法を選択したりする内容を取り入れ、保育現場に立った時に，幼児の実態や環境に合わせて幅広い保育を展開できるように指導した。

○　幼児の造形表現を真似て表現する内容を取り入れ、表現行動として現れる幼児の思考や感情、表現の困難さを疑似体験させ、子どもの理解を深めたり、保育する際の視点を明確にしたりできるように指導してきた。また，幼児を対象とした表現活動を、学生対象の内容となるように変更を加え、保育者自身が造形表現の楽しさ・面白さを十分に味わえるようにするとともに、年齢や経験差による表現の変化を捉えられるように工夫した。

(2) 実習に関わる科目について

○　保育実習指導Ⅱ並びに教育実習（事前事後の指導を含む）においては、実習に向けた準備として、実習先の理念や保育対象者の実態などによって学生個々に課題を設定することが求められる。よって、専攻職員全員で学生を分担し、フォローしてきた。そのため，職員間で指導方針を確認し、共通認識を持って指導に当たることが重要であった。実習を前にして学生はナーバスになりやすく、精神面も支えられるように努めた。

○　実習先への連絡や課題提出，実習の取り組み方や心構え，実習後のまとめ・報告など，実習前、実習中、実習後それぞれの授業内容を明確に示し、指導の取りこぼしがないように配慮し実践してきた。

(3) 教養科目「スタディスキルズ」及び基幹科目「生活文化各論」について

○　教養科目「スタディスキルズ」では、第 1 回から第 12 回までの授業を食物栄養学専攻と子ども生活専攻の 1 年生が合同で受講した。第 13 回から第 15 回までは専攻ごとに分かれ、それぞれの専門分野に沿った内容（子ども生活専攻では実習の際に必要となる実習先への電話のかけ方やお礼状の書き方，清掃の仕方）を指導した。

○　基幹科目である「生活文化各論」では、身近にある物の色や形に焦点を当て、その特徴や与える印象を活かして我々の生活の中で役立っているものがたくさんあることを伝えた。例えば、交通事故防止のための表示の中には、見る角度によって立体的に見え、運転者が減速したくなるような働きかけがされている。他にも、食品をよりおいしそうに見せる工夫や色による感情の変化など、これまではあまり意識されてこなかった造形表現の面白さに触れて講義し、生活の中の面白みに気付かせ、豊かな気持ちで生活していけるように促す。その際、写真や映像を積極的に活用し、実感を伴って理解できるように工夫した。食物栄養学専攻並びに子ども生活専攻の両方が履修するため、保育だけでなく、食に関わる事例も取り上げ、多くの学生が生活の中の造形に興味関心を持てるように配慮するとともに、講義の終盤には，かつてコーヒー飲料のコマーシャルとして流れていた映像を視聴させ、自分の生活は多くの人の働きによって支えられていることに感謝の気持ちを持てるように促した。

4　教育の成果

(1) 造形表現に関わる科目についての成果

○　基礎的な技能の習得のための短時間でできる活動を各授業に組み入れることで、少しずつ技能面での巧緻性が高まり、多様な表現ができるようになってきた。

○　活動の途中段階でそれぞれの表現方法や作品を見合う時間を設けたり、指導方法について意見交換

を行うグループワークを展開したりしたことで、自他の表現の良さを感じ取り、自分の表現に変化を持たせたり、思いや考えを意欲的に交流させたりする姿が見られ、自己肯定感の高まりや他者理解の深まりを感じることができた。

○　領域「表現」で目指す目標や内容や幼児期の子供の造形表現に見られる特徴と子どもの発達過程との関連性を理解できるように視覚教材を積極的に活用したところ、文字だけでは伝わりにくい、子どもの思考や感情なども捉えさせることができ、子ども理解に繋がった。

○　新聞紙を使って、幼児が行う造形表現を疑似体験させた。そのことにより，表現素材として新聞紙が万能であること、子どもが楽しさを見出すポイント、子どもの表現をさらに豊かにさせるための保育者の働きかけなどについての気付きが多く挙げられた。

○　幼児が行う造形表現の疑似体験で終わらせず、学生自らが表現者となって活動する内容に昇華させたところ、表現の楽しさ・面白さを味わっている様子が見られた。

○　活動後の作品を短大内の廊下やホール等に展示し、多くの人に鑑賞してもらうように工夫した。そのことにより見慣れた景色に変化がもたらされ、活気のある環境づくりが実現した。

・学生による授業評価

科目名	履修者数	回答数	開講時期	総合評価値
保育内容(表現Ⅰ)	15	13	1年前期	4.75
子どもと造形表現	24	21	2年後期	4.48

・授業の様子①（一つの題材から複数の表現活動への展開）

「クレヨンのドライブ」
クレヨンを使い、線の形や色、強弱，濃淡などの変化を付けながら画面構成する。(写真上部の作品)

「壁面製作：海の仲間たち」
「クレヨンのドライブ」の作品から魚の形を切り出し、それを使ってグループで壁面製作を行った。

・授業の様子②（幼児の造形表現から学生の造形表現へ）

「つんで　ならべて　かみこっぷ」
附属幼稚園・保育園の園児が行った造形遊びの録画を視聴し、幼児期の子どもの造形表現の特徴を探った。

「つんで　ならべて　かみこっぷ」
園児が行った造形遊びを模倣しつつ、学生ならではの感性を働かせて活動に取り組んだ。

・授業の様子③（幼児の造形表現の疑似体験）

「新聞紙で、へ・ん・し・ん！」
新聞紙を使った「ごっこ遊び」。幼児になりきって、表現の楽しさを味わった。活動の終末には「ファッションショー」と称して発表会を行い、互いの表現のよさや面白さを鑑賞した。

(2) 実習に関わる科目についての成果

○　実習に関わる指導内容には、事務処理的なものも多く、正確かつ期日厳守での提出が求められるなど，学生の学習態度や実習への意欲，取組状況などが強く反映することとなった。それに付随して教員側の指導・支援も授業内容の理解度だけでなく、学生の生活指導にまで及ぶこともあり、難しさを感じた。そのような状況にあっても、およその学生は順調に実習を終え，保育士資格並びに幼稚園教諭免許を取得するに至っている。しかし、保育所実習すらも乗り越えられずに途中で資格取得を断念してしまった学生も数名おり、個々の学習状況や資質・能力に応じた指導に課題が残った。

(3) 教養科目「スタディスキルズ」及び基幹科目「生活文化各論」についての成果＞

○「スタディスキルズ」では高校までと短大での学修の違いを押さえながら、ノートの執り方やレポートの提出方法など、授業で必要となるスキルを丁寧に指導した。ただ、定着の度合いには個人差があり、都度、指導を入れていく必要性を感じた。また、終盤で行った専攻独自の授業では，実習生としての常識的な内容を具体的な場面を想定しながら実践的に指導したが、指導の内容が実習指導や保育関連の授業と重複するところもあり、各授業の内容を確認し、他科目と関連付けて指導することで、指導者の違いによる齟齬が出ないような配慮が必要であった。

○「生活文化各論」では、身近にある色や形を切り口に、生活の中にある造形について講義を行い、色や形等の特徴や与える印象が我々の生活の中で役立っていることについて、実感できるように錯視による見え方の違いや色が持つイメージ等を映像を積極的に活用して伝えた。また，食物栄養学専攻並びに子ども生活専攻の両方が履修するため、保育や食に関わる事例も幅広く取り上げ、多くの学生が生活の中の造形に興味関心を持てるように工夫した。これらの取り組みにより、受講者からは「今まであまり意識していなかったが、身近にこんなに面白い造形物があったことに改めて驚いた。」「もっと他にも造形の要素が生かされているものを探してみたい。」等の感想が寄せられた。

5　教育の改善と今後の目標（今後どうするか）

(1)　授業方法の改善について

特に幼児の造形表現に関わる授業においては、適切な造形活動を提案できるように子どもの発達の過程を考慮し、素材や表現方法、環境設定を吟味し、２年間を通して様々な造形表現を体験できるように計画的に進めていく。

また、保育者が子どもと一緒に造形活動を行うにあたっては、その楽しさを保育者自身が理解していることが大切である。その観点からも、幼児がよく行っている造形活動を、短大生に合わせた内容に昇華させ、学生でも表現の楽しさを十分に味わえるような機会を増やしていく。

実習に関わる授業では、実習に関わる流れを短期・中期・長期で捉え，余裕を持って指導に当たれるように工夫する。さらに，実習指導の内容を充実させるため、職員の専門分野を生かし、より実践的な取り組みができるように職員の配置や内容について計画的に進めていく。

「スタディスキルズ」「生活文化各論」についても同様に、受講者に学生生活で必要な知識や技能を提供できるように、また、専門外の分野にも関心を広げ、より一層自分の生活を豊かにしていけるように、講義内容を見直し、工夫改善を加えていきたい。

(2)　学生の支援について

学習に対する意欲の度合いや能力、取り組みの態度は学生によりまちまちである。だが，どの学生もこの短大を学修の場として選んできているのだから、その思いを理解し、学生一人一人に合わせた教授方法を考えていきたい。そのことが学生に対する大きな支援となると考える。

できるだけ早い段階で学生の特性を掴み、励ましや指導に活かしていきたい。特に造形表現に関わる科目においては、授業担当者の見立てや声掛け，励まし等が、学生が保育者になった時の子どもに対する声掛け、励まし等に影響していくと考えているので、先入観で学生の個性や特性を決めることなく，一つでも多く、学生の良さを引き出せるよう、気を抜かずにしっかりとやっていきたい。